

# 和俗童子訓卷之三

## ○隨年教法

六歳云々一  
禮記の内則  
に、六年之  
に數と方名  
とを教ふ

七歳云々一  
内則に、七  
年男女席を  
同じうせず  
食を共にせ  
ず

一六歳の正月、始めて一二三四五六七八九十百千萬億の數の名と、東西南北の方の名とを教へ、其生れつきの利鈍をはかりて、六七歳より、和字を讀ませ、書きならはしむべし。はじめて和字を教ふるに、あいうえお五十韻を平がなに書きて、たてよこに讀ませ書きならはしむ。又世間往來のかなの文の手本をならはしむべし。此年ころより、尊長を敬ふ事を教へ、尊卑長幼のわかちをも知らしめ、ことばづかひをも教ふべし。一七歳、是より男女席を同じくしてならび坐せず、食を共にせず。此ころ、小兒の少し智出來、言ふことをきゝ知るほどならば、其智をはかり、年に宜しきほど、やうやく禮法を教ふべし。又和字のよみかきをも習はしむべし。一八歳、古人小學に入りし歳なり。はじめて幼者に相應の禮義を教へ、無禮を戒むべし。

此ころより、起居振舞の禮、尊長の前に出でて仕ふると退くと、尊長に對し、客に對し、物を言ひ、いらへ答ふる法、饌具を尊長の前にする、又取りて退く法、盃を出し銚子を取りて、酒をすくめ肴を出す法、茶をすくむる禮をも習はしむべし。又みづから食する法、尊長の賜はる盃と肴をいたゞき、客の盃を頂き飲む法、尊者に對し、拜禮をなす法を教へ知らしむべし。又茶禮をも教ふべし。

一かしづきて従ふ人より、まづ孝弟の道を教ふべし。能く父母に事ふるを孝とし、よく兄長に事ふるを弟とす。是人たる者の第一に勤め行ふべき道なる事、かしづきて師となる人、早く教ふべし。次に兄長を敬ひ従ひて、悔るべからざる事を教ふべし。兄長とは、兄弟をぢをば、また、いとこの内、其外にも、年たけて敬ふべき人を云ふ。凡孝弟の二は、人間の道を行ふ本なり。萬事の善は、皆是よりはじまれる事を教ふべし。父母兄長におそれつゝしみて、其教いましめを能く聞きて背かざる事を教ふべし。教を背きては、無下の事なり。父母を恐れず、兄長を侮らば、戒めてゆるすべからず。もし人を侮る事をゆるし、かへりて笑ひ悦べば、小兒は善惡を辨へずして、惡しからざる事とおもひ、長じて後、此くせやまず。子となり弟となる法を知らず、無禮にし

萬事の善は云々後漢書に、孝は百行の本衆善の始也

いつくしみ一慈愛を施すな

門戸の出入し一門戸を出入しの誤寫なるべきか  
今年の春一八歳の春をいふ

て不孝不弟となる。是父母おろかにして、子の惡をすくめなせるなり。漸く年を重ねば、弟を愛し、臣僕を恤み、師を尊び、友に交る道、賓客に對して、坐立進退、ことばづかひの法、各其品に隨ひて、いつくしみ敬ふ道を教へ知らしむべし。是よりややく孝弟忠信禮義廉恥の道を教へ行はしむ。人の財物を求め、飲食を貪りて、賤しけなる心を戒め、恥を知るべき事を教ふべし。七歳より前は、猶幼ければ、早く寝ねおそく起き、食するに時を定めず、大やう其心に任すべし。禮法を以て、一々に責め難し。八歳より、門戸の出入し、又は座席につき飲食するに、必年長せる人におくれ

て、先だつべからず、はじめて、へり下り讓る事を教ふべし。小兒の心任せにせず、氣隨なる事を堅くいましむべし。是肝要の事なり。  
一今年の春より、眞と草との文字を書きならはしむべし。はじめより風體正しき能書を學ばしむべし。手跡つたなく、風體悪しきを手本として習へば、悪しき事くせとなり、後に風體よき能書をならへども移らず。初は眞草ともに、大字を書き習はしむべし。初より小字を書けば、手すくみて働かず。又此年より、早く文字を読み習はしむべし。孝經小學四書などの類の、**文句**きむつかしきものは、初より讀み難く、覺え

難く、退屈し、學問を嫌ふ心出でてきて悪し。まづ文句の短くして讀易く、覚えやすきものを讀ませ、そらに覺えさせすべし。

一十歳、此年より師に隨はしめ、まづ五常の理五倫の道、あらく言ひ聞かせ、聖賢の書を読み、學問せしむべし。讀む所の書の内、まづ義理の聞え易くさとし易き、切要なる所を説き聞かすべし。是より後、やうやく小學四書五經を讀むべし。又其ひまに、文武の藝術をも習はしむべし。世俗は、十一歳の比、やうく初て手習など教ふ。遅しと云ふべし。教は早からざれば、心すさみ氣あれて、教を嫌ひ、怠にならひて、勤め學ぶ事難し。

心すさみ—  
心の慰み戯  
るゝ方に進  
むをいふ  
十五歳云々  
—大學の序  
に、十有五  
年に及べば  
則ち天子の  
元子より以  
て公卿大夫

一 小兒に、早く心もかほばせも溫和にして、人を愛し敬ひ、善を行ふ事を教ふべし。又心も身の起居振舞も靜かにして、みだりに動かさず、騒しからざらん事を教ふべし。一十五歳、古人大學に入りて學問せし歳なり。是より専ら義理を學び、身を修め人を治むる道を知るべし。是大學の道なり。殊更高家の子、年長じては諸人の上に立ちて、多くの民を預り、人を治むる職分重し。必小兒の時より、師を定め、書を讀ませ、古の道を教へ、身を修め人を治むる道を知らしむ。もし人を治むる道を知らざれば、天道

の嫡子と凡  
民の俊秀と  
に至るまで  
皆大學に入  
れ而して之  
に教ふるに  
窮理正心修  
身治人の道  
を以てす

より預け給へる多くの人をそこなふ事、恐るべし。凡の人も、其分限に應じて、人を治むるわざあり。其道を學ばずんばあるべからず。性質遲鈍なりとも、是より廿歳までの間に、小學四書等の大義に通ずべし。もし聰明ならば、博く學び多く知るべし。

廿歳云々—  
内則に、二  
十にして冠  
し始めて禮  
を學ぶ云々

一 廿歳、古もろこしには、廿歳にして冠を著るを、元服を加ふと云ふ。元服とは、かうべのきるものとよむ。冠のことなり。日本にても、昔は公家武家共に、廿歳の内にて、冠烏帽子を著たり。其時、加冠理髮などの役ありき。今も官家に此事あり。今武家に前髪を去るを元服と云ふも、昔の冠を著るになぞらへて云へり。元服を加へざる内は、猶わらんべなり。元服すれば、成人の道是より備はる。これより幼少なる時の心を捨て、成人の徳に隨ひ、博く學び、あつく行ふべし。其年に應じて、德行備らん事をおもひて勤むべし。もし元服しても成人の徳なきは、猶童心ありとて、昔も是を誇れり。

○讀書法

一 聖人の書を經といふ。經とは常なり。聖人の教は、萬世かはらざる萬民の則なれば、

服を加ふ爾の幼志を棄てて爾の成徳に順へ  
周程張朱一前註、八九頁參照

故紙に云々  
—顏氏家訓

常といふ。四書五經等を經と云ふ。賢人の書を傳と云ふ。傳とは、聖人の教を述べて、天下後代に傳ふるなり。四書五經の注、又は周程張朱、其外歴代の賢人の作れる書を、何れも傳と云ふ。經傳は、是古の聖賢の述べ作り給ふ所なり。其所載は天地の理に隨ひて、人の道を教へ給ふなり。其理至極し。天下萬世の教となれる鑑なり。天地人と萬物との道理、是にもるゝ事なきゆゑ、天地の間、是にまされる寶更になし。是を神明の如くに尊び敬ふべし。おろそかにし、穢すべからず。

一 およそ書を読むには、必まづ手を洗ひ、心に慎み、容を正しくし、几案のほとりを拂ひ、書冊を正しく几上におき、跪きて讀むべし。師に書を読み習ふ時は、高き几案の上に置くべからず。帙の上、或は文匣矮案の上に乗せて讀むべし。必人の踏む席上に置くべからず。書を穢す事なかれ。書を読み終らば、もとの如くおほひ納むべし。もし急速の事ありてたち去るとも、必をさむべし。又書をなげ、書の上を越ゆべからず。書を枕とする事なかれ。書の腦を卷きて、折りかへす事勿れ。唾を以て幅を揚ぐる事勿れ。故紙に經傳の詞義聖賢の姓名あらば、慎みて他事に用ふべからず。又君上の御名、父母の姓名ある故紙をも穢すべからず。

に吾れ聖人の書を読む毎に未だ嘗て肅敬之に對せずんば、あらず其故紙五經詞義及び聖賢の姓名われば、敢て他用せざる也と見ゆ。

三到—朱子の童蒙須知

一 小兒の記性を計つて、七歳より以上入學せしむ。初は早晨に書を読ませ、食後には讀ましめず、其精神を苦むる事勿れ。半歳の後は、食後にも亦令讀べし。一 凡書を読むには、いそがはしく早く讀むべからず。詳緩に讀之て、字々句句々分明なるべし。一字をも誤るべからず。必心に到り眼到り口到るべし。此三到の内、心到を先とす。心不在此、見れども見えず。心到らずしては、みだりに口に讀めども覺えず。又俄にしひて諳に讀み覺えても、久しきを歴れば忘る。唯心をとめて、多く遍數を誦すれば、自然と覺えて、久しく忘れず。遍數を計へて熟讀すべし。一 書熟して後、又一書を読むべし。聖經賢傳の益ある書の外、雜書を見るべからず。心を正しくし、行儀を慎み、妄に言はず、笑はず、妄に外に出入せず、妄に動作せず、志を學に專一にすべし。常に暇を惜みて、用もなきに、徒に隙を費すべからず。

一 小兒の文學の教は、事しゆくすべからず。事しゆく、文句多くしてむつかしければ、學問を苦みて、うとんじ嫌ふ心出來る事あり。故に簡要をえらびて、事少く教ふべし。少しづつ教へ、よみ習ふ事を嫌はずして、すき好むやうに教ふべし。むつかしく辛勞にして、其氣を屈せしむべからず。日々つとめの課程を、よきほどに短く定め





よみこゑ一  
よみは訓、  
こゑは音の  
謂なるべし  
従つてよみ  
こゑと連濁  
に讀過すべ  
からず

つ字を知らしむべし。其後、一句づつ教ふべし。既に字を知り句を覚えれば、小兒をし  
て自ら讀ましむべし。兩句を教ふるには、まづ一句を讀み覚えさせ、熟讀すれば、次  
の句を又右の如くに讀ましめ、既に熟讀して、前句と後句と通讀せしめて止むべし。  
如此する事數日にして、後又一兩句づつ、漸に添へて授くべし。其後授くるに、や  
うやく字多ければ、分つて二三次となして、授け讀ましめ、其二三次、各熟讀して、  
合せて通讀せしむ。もし其中覺え難き所あらば、其所ばかり又數遍讀ましむ。又甚讀  
み易き所をば、分ち讀む時は讀むべからず。是省功の法なり。

一書を讀むには、必句讀を明かにし、よみこゑを詳かにし、清濁を分ち、訓點に誤な  
く、てにはを精しくすべし。世俗の疎なる謬に從ふべからず。  
一書を讀むに、當時略熟誦しても、久しく讀まざれば必忘る。故に書を讀み終つて後、  
既に讀みたる書を、時々かへり讀むべし。又毎日前の三四五度に授かりたる所を、今  
日讀み習ふ所に通して、あとを讀むべし。如此すれば忘れず。  
一毎日一の善事を知り、一の善事を行ひて、小を積みて止まざれば、必大に至る。日々  
の功を怠り缺くべからず。初は、毎日日記故事、蒙求の故事などの嘉言善行を、一兩

記すべし一  
記憶すべし  
の義

事づつ記すべし。又毎日數目のる事を二三條記すべし。一日に一事記すれば、一年に  
は三百六十條なり。詩歌をよみ覺ゆるも此法なり。一日に一首覺ゆれば、一年に三百  
六十首なり。毎日誦して、日々忘るべからず。久しきを積みては其功大なり。

一 小兒に初て書を説き聞かするに、文句短く文義あさく、分明に聞え易く言ひ聞かすべ  
し。小兒に相應せざる、高く、深く、まはり遠く、むつかしく、聞きにくき事を教ふ  
べからず。又ことば多く長くすべからず。言少なくて、さとし易くすべし。まづ孝  
經の首章、論語の學而篇を早く説き聞かすべし。是本をつとむるなり。小學の書を説  
くには、義理を淺く軽く説くべし。深く重く説くべからず。是小兒に教ふる法なり。

一 小兒讀書の内に、早く文義を所々教ふべし。孝經にて云は、仲尼とは孔子の字な  
り。字とは、成人して名づくるかへ名なり。子は師のことを云ふ。曾子は孔子の弟子  
なり。參は曾子の名。先王とは、古の聖王のこと。不敏は鈍なること。又論語の首章  
を讀む時は、學ぶとは學問するを云ふ。習ふとは學びたる事を身に勤めならふなり。  
説ふとは面白きと云ふ意。樂むとは大に面白き意なり。かやうに讀書の序に文義を教  
ふれば、自然に書を曉し得るものなり

光陰箭のごとく、時節流るゝが如し。又曰、光陰惜むべし。是を流水に譬ふく云々。禪門諸祖、偈頌に光陰箭の如しと見え、又和漢古諺に時節流るるが如し、時人を待たずといへり。光陰惜むべし云々。此語顔氏家訓に出づ。

一古語に、光陰箭のごとく、時節流るゝが如し。又曰、光陰惜むべし。是を流水に譬ふと云へり。月日のはやき事、年々にまさる。一度行きて歸らざる事、流水の如し。今年今日の今時、再歸らず。なす事なくて、等閑に時日を送るは、身をいたづらになすなり。惜むべし。大禹は聖人なりしに、猶寸陰を惜み給へり。況や末世の凡人をや。聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を惜むとも云へり。少年の時は、記性強くして、中年以後、數日に覺ゆる事を、唯一日半日にも覺えて、身を終るまで忘れず。一生の寶となる。年老いて後悔なからんことを思ひ、小兒の時、時日を惜みて、いさみ勤むべし。かやうにせば、後悔なかるべし。

一書を讀み學問する法、年若く記憶強き時、四書五經を常に熟讀し、遍數を如何程も多く重ねて、記誦すべし。小兒の時に限らず、老年に至りても、常に循環して讀むべし。是義理の學問の根本となるのみならず、又文章を學ぶ法則となる。次に左傳を數十遍看讀すべし。其益多し。是學問の要訣なり、知らずんばあるべからず。

一小兒の時、經書の内、とりわき孟子をよく熟讀すべし。是義理の學に益あるのみならず、文章を作る料なり。此書文章の法則と筆力を助く。朱子も、孟子を熟讀して文法

韓柳歐蘇曾南豐、韓退之、柳宗元、歐陽修、蘇東坡父子、曾鞏をいふ、いづれも唐宋の大家也、曾鞏は宋の建昌南豐の人、故に此稱あり。

をさとれりと云へり。又文章を作るためには、禮記の檀弓、周禮の考工記を熟讀すべし。是等は皆古人の説なり。又漢文の内數篇、韓、柳、歐、蘇、曾南豐等の文の内にて、心に叶へるを擇びて、三十篇熟讀し、そらに書いて忘れざるべし。作文の學、必如此すべし。

一四書を、毎日一百字づつ百遍熟讀して、そらに讀みそらに書くべし。字の置き所、助字の有り所、ありしに違はず覺え讀むべし。是程の事、老らくの年といへども、勤めてなし易し。況や少年の人をや。四書をそらんぜば、其力にて、義理に通じ、諸の書を読むこと易からん。又文章のつゞき、文字の置きやう、助字の有り所をも、能く覺えて知れらば、文章を書くにもまた助となりなん。斯の如く、四書を習ひ覺えば、幼學のつとめ、過半は既に成れりと云ふべし。論語は一萬二千七百字、孟子は三萬四千六百八十五字、大學は經傳を合せて千八百五十一字、中庸は三千五百六十八字あり。四書すべて五萬二千八百四字なり。一日に百字を讀んで、そらに覺ゆれば、日數五百廿八日に終る。十七月十八日なれば、一年半には足らずして、其功終りぬ。早く思ひ立ちて、斯の如くすべし。是にまさる學問のよき法なし。其つとめ易くして、其功

年のつもりに一年の積りたる結果としての意

朱子綱目一  
通鑑綱目五  
十九卷をいふ、司馬光の資治通鑑に據り綱目に分ち撰せ

るもの也、  
朱子の作と稱すれども其實は朱子の凡に本づき其門人趙師淵が編輯せるものなりと傳ふ、周の威烈王二十三年より後周世宗の代に至る一千三百六十二年間の紀也  
氣臆一記憶に作るべきか

は甚大なり。我がともがら、若き時此良法を知らずして、空しく過し、今八十に成りて、年のつもりに、やうく學びやうの道、少し心に思ひ知れる故、今更悔甚し。又尙書の内純粹なる數篇、詩經周易の全文、禮記九萬九千字の内其精要なる文字をえらんで三萬字、左傳の最要用なる文を數萬言、是も亦日課を定めて百遍熟讀せば、文字に於て、恐らくは世に類なかるべし。是學問の良法なり。

一史は古を記せるふみなり。記録の事なり。史書は往古の迹をかながへて、今日の鑑とする事なれば、是亦經につぎて必讀むべし。經書を學ぶいとまに、和漢の史を讀み、古今に通すべし。古今に通ぜざれば、くらくして用に達せず。日本の史は、日本紀以下六國史より、近代の野史に至るべし。野史も亦多し、廣く見るべし。中夏の史は、左傳、史記、漢書以下なるべし。朱子綱目の書は、歷代を通貫し、世教を助けて、天下萬世に益あり。經傳の外、是に及べる好書はあるべからず。此一書を出でずして、古の事に通じ、善惡を辨じ、天下國家を治むる道理明なり。誠に世の寶なり。學者是を好んで玩覽すべし。殊に國家を治むる人の鑑なり。又通鑑前編續編をも見るべし。前編伏犧より周まで、朱子綱目以前の事を記せり。續編は宋元の事を記す。朱子綱目

以後の事なり。是に續きて、皇明通記、皇明實記などを見れば、古今に貫通す。  
一 小兒の時より、學問のひまを惜み、あだなる遊をすべからず。手習ひ、書をよみ、藝を學ぶを以て、遊とすべし。かやうの勤、初は面白からざれども、やうやく習ひなれぬれば、後は慰となりて、いたつがはしからず。凡よろづの事は、皆暇を用ひて出来るものなれば、いとま程の身の寶なし。四民共に同じ。かほどの惜むべき大切なるいとまを空しくして、時日を費し、又は用にも立たざる益なきわざをなし、無頼の小人に交り、ひまを惜まずして、徒に爲す事もなくて月日を送る人は、終に才智もなく、藝能もなくして、何事も人に及ばず、人にいやしめらる。少年の時は、氣力も氣臆も強ければ、ひまを惜み、書を讀み置くべし。如此すれば、身を終るまで忘れず、一代の寶となる。年たけ齒ふけぬれば、事多くしてひまなく、氣力へりて氣臆弱くなり、學問に苦勞しても、しるし少なし。少年の時、此ことわりを能く心得て、ひまを惜み勤むべし。若き時怠りて、年老いて後悔すべからず。此事、前にも既に言ひつれども、老のくせにて、同じことするは、聞く人いとふべけれど、年若き人に、能く心得させんために、返すく告ぐるなり。凡の事、後のためによき事を専らに勤



むべし。初勤めざれば、必後の樂なし。又後の悔なからん事を計るべし。初に慎  
ます怠りぬれば、必後の悔あり。  
一 小兒の書を読むに、文字を多く覚えざれば、書を読むに力なくして、學問進まず。又  
文字を知らざれば、すべて世間の事に通ぜず。藝など習ふにも、文字を知らざれば、  
其理にくらくして、ひが事多し。文字を知らば、又其文義を心に懸けて通し知る  
べし。

